殺人百科 Part III

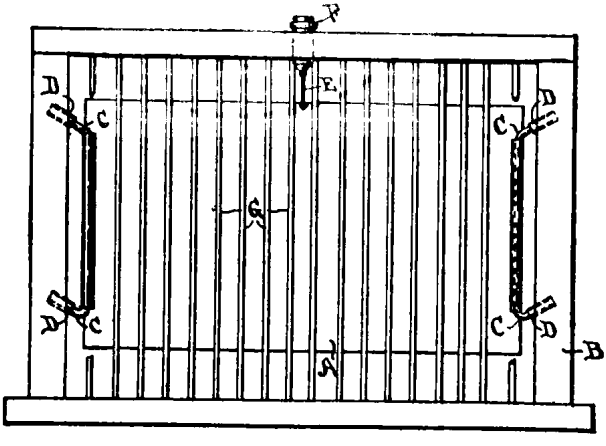
陰の隣人としての犯罪者たち

佐木隆三

殺人百科 *Part* III

陰の隣人としての犯罪者たち

佐木隆三



徳間書店

〈さき　りゅうぞう〉

一九三七年生まれ。六三年「ジャンケンポン協定」で新日本文学賞受賞。六八年「奇蹟の市」が芥川賞候補、「大将とわたし」が直木賞候補となる。

一九七六年、大作『復讐するは我にあり』で第七十四回直木賞を受賞。その比類なき手法で、現実の犯罪を完璧なまでの小説にした作品は、日本の文学界に大きな衝撃を与えた。

書斎派作家になることを拒絶し、精力的に取材活動を続ける著者の作品は、他の追随を許さない。

著書に『偉大なる祖国アメリカ』『ドキュメント狭山事件』『越山田中角栄』『殺人百科』『事件百景』『詐欺師』『沖縄住民虐殺』『曠野へ』『海燕ジョーの奇跡』『冷えた鋼塊』など多数。

殺人百科PART Ⅲ

陰の隣人としての犯罪者たち——

1982年3月31日　初刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者　佐木隆三

発行者　徳間康快

発行所　株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇

電話東京(433)六二三一番(代表)

振替　東京　四—四四三九二

(乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えいたします。)

〈編集担当　今井鎮夫〉

印刷・長苗印刷(株)　製本・大口製本印刷(株)

©1982 Ryuzo Saki Printed in Japan

ISBN4-19-122456-5

殺人百科 PART Ⅲ ——陰の隣人としての犯罪者たち——

目次

第一話……淫獣　小平義雄……5
第二話……冷血　正田昭……37
第三話……誘拐魔　本山茂久……71
第四話……酩酊魔　石部金吉……103

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五話……爆破狂　若松善紀…137
第六話……鉄砲玉　鳴海清…177
あとがき…198
殺人事件年表…201

装幀　秋山法子

第一話

淫獣　小平義雄

小平義雄は、一九〇五（明治三十八）年一月二十八日に、栃木県上都賀郡日光町大字細尾で生まれた。生家は今市から足尾に抜ける街道に面した旅館で、彼は六番目の子だった。

父親は義侠心に富んだ性格だったが、おだてにのりやすく、酒を飲むと失敗する。いわゆる飲む・打つ・買うの三拍子そろっており、家業は傾くいっぽうである。やがて旅館は人手に渡り、山林や畑地も売り払ってしまう。

そんな家庭で育ったせいか、日光尋常小学校西分校に入学してからも、成績は劣等であった。一年から六年まで、操行は〈丙〉と評価され「不注意、不熱心、無精にして喧嘩せざるの日はなし」「粗野にして乱暴、奸智に長け盲動す、成績不良」と記録されている。

短気者で、すぐカッとして乱暴を働く。ふだんは、無言ではにかみ屋なのだが、小さい時分からドモリがひどく、意思がうまくつたわらないとき、激昂するのだった。ただし強い者にはあたらず、弱い者をいじめる。といって、女子は例外である。どんなばあいも、手を出すようなことはなく、むしろ親切であった。

一九一七（大正六）年三月に小学校を卒業したが、成績は男子二十三人のうち、二十一番目だった。卒業式に、順番に証書を受取る。この練習のとき、ふざけたりして直立十分間を命じられた。学校の記録に、三月三十日「注意して処罰」とある。

しばらく家に居たが、翌年になって東京へ出て、池袋の東洋金鋼に就職した。しかし見習工として、わずか数カ月働いただけで、やめてしまった。

そのあと銀座の亀屋食料品店に就職した。ここで二年間働いて、日光へ帰った。

地元には、古河電工の精銅所がある。叔父や兄も、精銅所で働いている。十六歳でここへ見習工として入り、十九歳のとき退職した。海軍へ志願したのだ。

一九二三年六月、横須賀海兵団へ入ったとき、郷里の人びとは驚いた。なにしろ吃音がひどく、足で床をバタバタさせねば、声が出ないほどだった。よく海軍が採用したものだと、いぶかったのである。

海軍では、機関兵だった。戦艦『金剛』『山城』のほか、潜水艦『伊1号』にも乗り込んだ。また練習艦『八雲』で、オーストラリア、ヨーロッパへも遠洋航海した。

一九二九（昭和四）年五月に海軍を除隊した。六年間つとめて、三等機関兵曹になっていた。

除隊後は、古河精銅所へ復職した。軍隊に入る前は無骨で、お世辞などいえない男だったが、だいぶ性格が変って、社交的になった印象を与えた。そのぶんだけ、悪くもなっていた。平気でウソをつき、安請合をしては、すぐに忘れるのである。女に親切なのはあいかわらずで、酒はぜんぜん飲まないし、初めのうち関心を集めるけれども、たちまちボロが出るといった体（てい）だった。

一九三二年一月に、見合結婚した。職場の工場長が、姪を紹介したのである。

この結婚は、円満にいった。すくなくとも彼はそう思っていたのだが、六月に入って、六つ下の妻は、田植の手伝いをすると実家へ帰り、それきり戻って来ない。迎えに行っても、ぐずぐずしている。

じつは妻の実家では、離婚させようとしていた。結婚後に分ったことだが、新郎は、遠縁の娘を妊娠させていた。その娘は、私生児を生んでいる。こんな不実な男は居ないと、妻の父親や兄が怒っていたのだ。

「粗野にして乱暴、奸智に長け盲動す」の性格は、大人になっても変らない。女房は自分に惚れているのに、親

兄弟が妨害をしていると、夜半に鉄棒を持って押しかけた。

一九三二年七月三日（日曜）の『東京朝日新聞』には、次の記事が見られる。

栃木に狂暴漢

八名を鈍器で撲る

【宇都宮電話】二日午前二時頃、栃木県上都賀郡東大芦村字下沢の神職・宮本織蔵（六四）方で、織蔵の五女てる（二二）の前夫である、日光町大字細尾の無職・小平義雄（二八）が、長さ二尺五寸の金てこを以て、同家十二畳の室に就寝中の織蔵に瀕死の重傷、同人妻さい（六四）に三週間、五女てるに二週間、孫もと（九つ）に二週間、さらに八畳間に就寝中の長男一馬（三五）に二週間、四女まつよ（二四）に四週間、同六畳の間に居た次男外記（二八）に五週間、および同家に泊っていた石原英作に三週間、都合八人のいずれも頭部に重傷を負わせ、騒ぎを聞きつけ駆けつけた近隣の人に取押えられた。原因は義雄が、日光精銅所を先月解雇され離縁になっていたので、てるとの復縁を度々申しこんだが聞き容れられないので右の始末に及んだもの。

同じ日の紙面には、満州国承認問題がいよいよ大詰めにさしかかり、朝鮮銀行・台湾銀行の銀行券を日本銀行券に統一すること、ロンドンにおいて日本公債の買人気が高まったこと、ロサンゼルス・オリンピック大会の開会式において日本選手団が二十六番目に入場することなどが報じられている。

そして六、七面の二ページにわたっては、

「日本の夜明けは来た！　輝かしくも旺んなる日の出！　一家一冊！　老若男女挙げて愛読すべき理想雑誌！」として、新潮社が創刊した『日の出』の大広告である。

「全国民に訴ふ＝陸軍大臣荒木貞夫／学生に語る＝文部大臣鳩山一郎／日本は世界第一なり（特集）／日米戦はば空軍の襲撃を如何に防ぐか？／長篇小説心の波止場＝牧逸馬／燃える富士＝吉川英治／日露未来戦＝山中峯太郎／日の出三大懸賞ありお見逃しなく！　二大附録つき

定価五十銭／全国書店にあり」

社会面には六月三十日から降りはじめた雨が、西日本では大豪雨となり「惨状言語に絶す／鹿児島の川内川流域」とある。また政府米の払下げ運動の「〝食はせろ〟の叫び」吉原遊廓がさびれて三十数軒の引手茶屋が「転業希望」「王子三人殺傷犯人／霞ヶ浦で投身自殺」「埼玉県下に強盗横行／またすごいのが現る」「心中ばやり／東北帝大助手恋の三角関係か／花巻心中は二高生に酌婦」

上都賀郡東大芦村における、神職一家への凶行は、父親が病院で死亡し、殺人・傷害事件となった。

一九三三年二月四日、東京控訴院は懲役十五年の判決を言い渡し、小平義雄は小菅刑務所に服役した。しかし大日本帝国においては慶事が重なり、二度も恩赦に浴し刑期は短縮する。

一九四〇年九月二十三日、仮出獄。

七年半で社会復帰をはたした、元海軍三等機関兵曹は、まず群馬県の草津温泉で、刑務所の垢を落した。そして東京へ出て、機関兵の経験を生かし、ボイラーマンとして工場で働く。ただし一ヵ所に長く居たのでは、仮出獄中であることが知れる。いくつかの工場を、転々としなければならなかった。

一九四一年八月、サイパン島へ渡る。飛行場建設の労働者を募集していたからで、ローラー運転手として働き、翌四二年四月に東京へ帰った。

すでに太平洋戦争に突入している。サイパン帰りの、三十七歳の元海軍三等機関兵曹は、蒲田の日本製鋼で半年、さらに大森の鈴木製氷で八ヵ月働いた。

一九四三年八月、海軍第一衣糧廠に就職。これは五反田の勤労動員所の紹介であり、ボイラー係になった。初めの四ヵ月は、本廠で機関の据付にあたり、やがて女子寮へ移され、部下が五、六人居るボイラー主任になった。

一九四四年二月、結婚。知人から、富山県出身の二十八歳の女性を紹介されたのである。その前にも見合いをしているが、痩せていたので断った。太った女が、好みなのである。相手には前科を隠し、一度結婚したが死な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れた、と話した。給料は、基本給が七十五円で、手当がついて百七十円になる。食事は職場で支給されるから、生活は楽であった。

一九四五年二月、男児出生。この子が生まれてから、妻を疎開させることにした。空襲が激しくなってきたし、子どもに危害がおよぶのを恐れ、四月に富山県へ送った。

目黒のアパートに住んでいたが、一人になってから、渋谷の若木町に一軒家を借り、ここから品川の大井海岸町の海軍第一衣糧廠第一女子寮へ通勤した。

一九四五年六月十三日、衣糧廠を退職。若木町の借家が空襲で焼けたし、衣糧廠も疎開している。自分も富山へ行くことにしたのだった。

妻の実家へは、七月十八日に現われた。そして妻の兄の世話で、不二越鋼材東富山製鋼所の守衛になった。敗戦の日をはさんで、ここには九月二十一日まで勤めた。

守衛をやめてすぐ、富山の薬をかき集め、東京へ持って出た。渋谷の道玄坂で、それを売ったのである。

この商いは、思ったほどうまくいかなかった。十一月一日に富山へ行き、薬代を清算すると、彼だけ東京へ帰った。妻の弟が渋谷で運送店をしているので、それを手伝ってリヤカーを引いた。十二月に入ると、妻子を迎えに行き、渋谷区羽沢町で親子三人で暮した。

一九四六年三月一日、新聞広告でアメリカ進駐軍が雑役夫を募集していたので、芝高浜町の海軍経理学校跡にある、ランドリー兵舎で働くようになった。

進駐軍で働いているのだから、ときどき食糧など持ち帰る。誕生日を過ぎて、ヨチヨチ歩きの息子は、とても可愛がる。妻に対しても、ふだんは優しい。だがときどき、食べ物が気に入らないといって膳を引っくりかえすようなことがあった。あるいは鏡台を、マキ割りで壊したりもする。

しかし、そんな亭主は、どこにでも居る。平凡な働き者であるから、妻にしても大きな不満はなかった。

一九四六年八月十九日午後七時すぎ、渋谷区羽沢町の借家に、愛宕署の刑事たちがやって来た。ランドリー兵舎勤務の雑役夫は、玄関わきの部屋で戸を開け放ち、サ

ルマタひとつで涼んでいた。
「あんたが小平さん？」
「そうですよ」
愛想よく答えたところへ、四人の刑事が飛びかかった。その二日前に、芝公園の増上寺境内の、西向き観音の裏山で絞殺死体になっていた、十七歳の女性殺しの被疑者として逮捕されたのである。

八月十八日付の『朝日新聞』には、次の記事が見られる。

裸体と白骨の女死体

増上寺境内草むらに謎の事件

十七日朝九時半ごろ、芝公園二号地の増上寺境内西向観音山の笹むらの中に、死後約十日を経過した二十歳ぐらいの、丸裸の女の死体があった。首に手拭ようのものが巻きつけてあり、他殺の線が濃厚なので、附近一帯を綿密に調べたところ、午後三時すぎ現場から約十間ぐらい上の草むらの中に、同じく死後約一カ月のほとんど白骨となった仰向けの女の死体を発見、このほうの死体は白シュミーズ、格子スーツに茶色ズック靴、白いソックスをはいているだけで、いずれも身許不明。

発見者は、大森から雑木を伐りに来た、キコリであった。笹むらに蠅が群っているので近づいてみたら、女の腐爛死体だったのである。愛宕署員が駆けつけ、現場検証をしているとき、白骨死体に気づいた。

あたりには、家が一軒あるだけで、夜になるとアベックが集まる。しかし夜なら、笹むらの死体が人目につくこともなかった。

二つの死体は、いずれも殺人事件とみなされた。同一犯人が、被害者を連れて来て絞殺した可能性が強い。

こうして捜査本部が、愛宕署に置かれた。警視庁防犯課が受付けた家出人捜索願いを洗いはじめたころ、十八日の新聞で見たといって、「ウチの娘では……」と五人の親があらわれた。

その一人で目黒署に問合せたのが、大相撲行司・式守

伊三郎の夫人だった。伊三郎は東北巡業中で、夫人は三女と共に目黒区下目黒の親類に寄住している。三女は十七歳で、この春に女学校を卒業したばかりだが、八月六日から行方不明だという。

やがて母親によって、腐爛死体が娘であることが確認された。右手の指に、瘰疬の傷あとがあったのだ。三女は八月六日朝、白ズック靴をはき、白ワンピースを着て、十円を持って家を出た。世話してくれる人が居て、進駐軍の試験を受けに行ったのである。それというのも、一ヵ月前に、品川駅構内で事故があり、娘が立往生しているとき中年男が話しかけてきた。求職中と告げたら、世話してやるというので、住所を教えた。男もまた、自分の住所を教えた。

なんでも進駐軍に勤めているとか。

娘は大いにあてにして、

「親切そうなおじさん」

信用している様子だった。

だが娘は、大腸カタルにかかって、寝こんでしまった。

そこへ男が、訪ねて来た。

「せっかくいい仕事を見つけたのに、連絡がないので心配になって……」

これには母親も恐縮し、わざわざ訪ねてくれた男の話を聞くと、アメリカ軍兵舎で働けるという。早く面接を受けなければ、ほかの者に決めてしまうかもしれない。そこでさっそく、翌日の約束になったのだ。

八月六日午前十時に、品川駅東口で待合せたはずである。しかし娘は、帰って来ない。母親は不安になって、教えられた住所に男を訪ねたら、確かに居た。

だが、こないだ親切だった男は、ひどく無愛想に応対した。

「いったい、このごろの娘は、なにを考えているんですかね」

約束の場所に、時間どおりに待っていたのだが、とうとう現れなかったという。そんなはずはない、あれほど張切って出かけたのにと、母親がくいさがったら、

「じゃあ待合せ場所をまちがえたのかな？」

いかにも気の毒そうな顔をする。
そういわれれば、どうしようもない。母親はすごすご、帰るほかなかった。
捜査本部は、有力な容疑者として、名前の浮んだ小平義雄を逮捕した。とりあえずは、家出人捜索願いを受付けた目黒署へ拘引した。
「知らないなあ、そんな娘は……」
取調室では、そう言って否認した。しかし家宅捜索で、女もののパラソルが発見された。これは行司の三女が、さして出たものだった。
「その傘なら、いつかコメの世話をした女の人から礼にもらった」
のらりくらりと弁解していたが、逮捕翌日の午後には、とうとう自供した。
「じつをいうと、私がやりました」
供述によれば、八月六日午前十時に、約束どおり品川駅東口で、行司の三女に会った。さっそく面接に連れて行ってもらえると、娘は緊張している。だが就職あっせんは、出まかせである。
——今日は米軍兵舎に出入りする証明書がないからダメだ。あとで丸の内のアメリカンクラブで、紹介状をもらってあげる。その前に、食事でもしながら、ゆっくり話しましょう。
こうして、芝公園二号地の西向観音山へ行き、山道でいっしょにパンを食べた。目的はあくまでも、娘の体である。彼の手順どおりに迫ったら、激しく拒まれたので、顔面を数回殴った。こうすると、抵抗しなくなる。じっくり姦淫を楽しんだあと、両手で頸部を絞めた。娘は白木綿の、腹巻をしていた。これを引き裂いて、頸部に巻きつけ、息の根を止めた。衣類や靴は放り捨て、所持金の十円とパラソルは、家に持ち帰った。
こうして、行司の三女殺しは、解決した。敗戦直後の混乱のさなか、スピード解決といっていい。被害者の母親が、誘い出した男の身元を知っていたため、逮捕につながったのである。

しかし新聞は、母親に批判的だった。以下八月二十二日付『朝日新聞』から引用する。

母親の不注意から

芝山内事件　甘言に乗った被害者

芝山内の少女殺しは、若い娘を持つ世の親たちに鋭い警告を与えているが、被害者の柳子さんは十七歳とは見られない大柄で、よく女相撲と呼ばれているほど。性格は明朗快活で世間なれしない、純な少女であったという。親切な小父さんと思った四十男の小平が、恐ろしい毒牙を秘めていようとは露知らず、殺された八月六日の朝も、就職出来るものと喜びいさんで家を出たのだった。

七月十日に品川駅で柳子さんと小平が初めて会ったときは、就職口を世話しようといわれてすっかり喜び、小平からジャムつきのパンを貰って帰ったほどの無邪気さ。母親には何もかくさず、一切を話していたらしく、小平にちょっと妙なことを言われ、小使いを貰ったことも打明けている。少し注意深い母親なら、おかしいと気がつきそうなものだと、警視庁の係員も首をひねっている。

この日の紙面では、西宮球場における全国中等野球大会決勝戦で、京都二中と対戦した浪華商が二―〇で勝ち、平古場投手が最優秀選手に選ばれたことを報じている。

また総司令部は、八ヵ月にわたる日本人の栄養状態調査の結果を、「多面的な食生活により栄養状態は好転」と発表した。

だが東京都では「メチールの中毒死続出」で、この二日間だけでメチール入り焼酎を飲んだ七人が死亡、八人が重態になっている。

また東京都住宅営団が赤坂連隊跡に建てた、戦災者収容住宅が、畳もなく窓ガラスもない、野ざらしのバラックなのに、一部屋あたり五十円から百円もの家賃を取っていることに抗議し、「戦災・引揚者起つ！」とある。

ところで芝増上寺境内の、もう一つの白骨死体のほうは、なかなか身元が分らない。

第一報は混乱していたが、十七、八歳と推定され、着

衣は白ブラウス、黄色の吊りスカート、スフ地アンダーシャツ。足には肉色に染めた、かなりツギの当った軍隊用靴下で、十文三分の赤色ゴム底ズック靴をはき、ブラウスのポケットにはハンケチがわりと思われる薄手スフ地の布片が入っている。

目黒署から、捜査本部のある愛宕署へ移された小平義雄は、

「さあ、知らないな」

まったく反応を示さない。

捜査本部としては、被害者の身元が分らないことでもあるし、追及の決め手に欠ける。むしろ二ヵ月前の、芝高浜町の少女殺しとの関連を、追及すべきだと判断したのである。

六月十三日午後三時ごろ、芝高浜町七丁目の運送会社の廃車置場で、女の腐爛死体が発見された。トラックの下で蛆に食われていた死体は、白骨化しかけている。首にネッカチーフが巻きつけられたままで、絞殺されたとみられ、検屍により十五、六歳と推定された。

やがて被害者は、江戸川区平井町の、毛筆製造業者の次女と分った。平井第三国民学校の高等科二年で、わずか十四歳である。

少女は五月二十日ごろから、学校を無断で欠席し、家出をしていた。両親が熱心に探した形跡はない。少女は品川区東品川の、一人暮しの女性の部屋に、転がりこんでいた。

東品川の女性と、少女の間には、何の縁もない。或る男に頼まれて、あずかることにしたのだ。

「その男の人は、元海軍主計中尉で、今は進駐軍で働いています」

したがって、食糧が手に入る。男は彼女の部屋へ、定期的に運んで来る。はっきりいえば残飯なのだが、パンありソーセージあり肉あり……で、十分に惹きつける力がある。その残飯を代償に、囲われていた恰好なのだった。

十四歳の少女は、うろついていた品川駅で男に声をかけられ、残飯の魅力で家出した。だが東品川の女性の部

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com